

No.20

PP. 143 ~ 156

25. II. 1977

# 寄せ蛾記

埼玉蛾類談話会発行

YOSEGAKI: THE SAITAMA HETEROCHERISTS' GROUP

飯能で採集したセセリチョウ数種の  
幼生期の記録(I)

信太利智

筆者がセセリチョウの生態の調査に飯能を訪れるようになって、かむり久しい。その主目的はホソバセセリの周年経過の実態を探ることであり、これについてある程度の結果を得たので一応の区切りをつけることとしたが、この間、他の種についても幼虫などの探索と採集を行ない、いくらかのメモを残してきた。その一部はすでに原聖樹氏によって本誌 No. 18 (1976) に発表され、またホソバセセリの周年経過については別途報告の予定となっていいるが、上記以外の記録は未整理のままであったので、それらを種別にまとめ、気づいた点も書きとめておくこととした。

この記録を発表する機会を計られた原聖樹氏と市川和夫氏にお礼を申し上げる。

(記録内容について)

- 1) 1966年から1974年にかけて埼玉県飯能市飯能で得たセセリチョウ類幼生期のうち、ホソバセセリを除く各種について記録する。＊印は原氏によって発表されたものの再録である。
- 2) 一部の種(または個体)については、採集データと飼育経過とを合わせて個体別に記録する。
- 3) 飼育は東京都渋谷区恵比寿の筆者の旧居で行ない、栽植した屋外食草への放飼、2. 屋外での容器内飼育、3. 屋内での容器内飼育、のいずれかによった。  
飼育の形式と与えた食餌は〔 〕内に記す。
- 4) 採集時1齢以外の幼虫は齢期を確定できないため、経過記録では飼育開始後の幼虫脱皮の回数を( )内に示した。

信太利智：千葉市真砂3-17-3-202 (〒280)

## ヒメキマダラセセリ

- ・個体番号1～5の卵は産卵観察(信太, 1972)で見たものの一部である。
- ・幼虫に付記した頭幅は生幼虫のものではなく、飼育開始後の最初の脱皮で得られた頭殻の計測値である。
- ・飼育は全例屋外容器によったので、飼育形式の個別記録は省略した。ただし、晚秋に終齢に達した幼虫だけはその日から屋内に移した。

### <記録>

1. 卵. 1968 - VI - 9 (当日産下), オオアブラススキ  
VI - 17 孵化, VI - 23 1眼起, VI - 28 2眼起,  
VII - 4 3眼起, VII - 10 4眼起, VII - 16 5眼起,  
VII - 23 孵化準備(巢口閉鎖)開始, VII - 24 前蛹化,  
VII - 25 蛹化, VIII - 3 羽化(♀). [アキノエノコログサ]
2. 卵. 1968 - VI - 9 (当日産下), アズマネザサ  
VI - 17 孵化, VI - 29 1眼起, VII - 6 2眼起,  
VII - 11 3眼起, VII - 16 4眼起, VII - 21 5眼起,  
VII - 31 孵化準備開始・前蛹化, VIII - 1 蛹化,  
VIII - 10 羽化(♀). [アキノエノコログサ]
3. 卵. 1968 - V - 9 (当日産下), 力ゼクサ  
VI - 17 孵化, VI - 27 1眼起(脱皮不完全).  
VI - 28 死. [アキノエノコログサ]
4. 卵. 1968 - VI - 9 (当日産下), アズマネザサ  
VI - 17 孵化, VI - 26 1眼起, VI - 28 死. [アキノエノコログサ]
5. 卵. 1968 - VI - 9 (当日産下), シダ"の一種  
VI - 17 孵化, VI - 24 死. [アキノエノコログサ]
6. 1齢幼虫(頭幅 0.541 mm). 1968 - VII - 7, オオアブラススキ  
VII - 8 1眼起, VII - 13 2眼起, VII - 19 3眼起,  
VII - 27 4眼起, VIII - 10 孵化準備開始・前蛹化,  
VIII - 11 蛹化, VIII - 20 羽化(♀). [オオアブラススキ]

7. 若齢幼虫(頭幅 0.785 mm, 推定2齢). 1968 - VII - 7, オオアブラススキ  
VII - 9 脱皮(1), VII - 15 脱皮(2), VII - 22 脱皮(3),  
VII - 30 脱皮(4), VIII - 16 蛹化準備開始・前蛹化,  
VIII - 20 死・寄生バエ幼虫脱出. [オオアブラススキ]
8. 若齢幼虫(頭幅 0.790 mm, 推定2齢). 1968 - VII - 7, カゼクサ  
VII - 10 脱皮(1), VII - 19 脱皮(2), VII - 25 脱皮(3),  
VIII - 6 蛹化準備開始・前蛹化, VIII - 7 蛹化,  
VIII - 16 羽化(♀). [アキノエコログサ]
9. 蛹. 1968 - VIII - 4, オオアブラススキ  
VIII - 8 羽化(♂).
10. 前蛹. 1968 - VIII - 4, オオアブラススキ  
VIII - 5 蛹化, VII - 8 死.
11. 終齢幼虫. 1968 - VIII - 4, ススキ  
VIII - 6 蛹化準備開始・前蛹化, VIII - 7 蛹化,  
VIII - 14 羽化(♀). [ススキ]
12. 中齢幼虫(頭幅 1.046 mm, 推定3齢). 1968 - IX - 8, ササクサ  
IX - 15 脱皮(1), IX - 28 脱皮(2), X - 6 脱皮(3),  
<以下屋内> X - 22 蛹化準備開始, X - 23 前蛹化,  
X - 24 蛹化, XI - 9 羽化(♂). [ササクサ]
13. 若齢幼虫(頭幅 0.776 mm, 推定2齢). 1968 - IX - 8, オオアブラススキ  
IX - 13 脱皮(1), IX - 25 脱皮(2), X - 4 脱皮(3),  
X - 11 脱皮(4), X - 30 脱皮(5). <以下屋内>  
XI - 22 蛹化準備開始, XI - 23 前蛹化, XI - 24  
蛹化, XII - 11 羽化(♂). [ササクサ → ススキ →  
アキノエコログサ → ササクサ]
14. 亜終齢幼虫(頭幅 2.083 mm). 1969 - VII - 27, オオア  
ブラススキ  
VII - 31 脱皮, VIII - 18 死. [ナリヒラタケ]

15. 終齡幼虫. 1969 - VII - 27, ススキ  
VIII - 2 脱皮準備開始・前蛹化, VIII - 3 蛹化,  
VIII - 12 羽化(否). [ナリヒラダケ]
16. 中齢幼虫(頭幅 1.344 mm). 1969 - X - 10, ススキ  
X - 15 死. [ススキ]
17. 亜終齡幼虫. 1971 - VII - 25, オオアブラススキ  
VII - 28 脱皮(1), VIII - 7 脱皮準備開始,  
VIII - 8 前蛹化, VIII - 9 蛹化, VIII - 19 羽化(否)  
. [ナリヒラダケ → アズマネザサ]
18. 終齡幼虫. 1971 - VII - 25, ススキ  
VII - 29 (蛹化準備開始), 前蛹化, VII - 30 蛹化,  
VIII - 8 羽化(否). [ナリヒラダケ → ススキ → アズマネザサ]
19. 中齢幼虫(頭幅 1.063 mm, 推定 3 齡). 1972 - IX  
- 17, ススキ  
IX - 20 脱皮(1), X - 1 脱皮(2), X - 11 脱皮(3),  
<以下屋内> X - 22 脱皮準備開始, X - 25 前蛹化,  
X - 27 蛹化, X - 30 死. (XI - 2 寄生バエ幼虫  
脱出). [ナリヒラダケ]
20. 1 齡幼虫(頭幅 0.506 mm). 1973 - VII - 1, オオア  
ブラススキ  
VII - 1 脱皮(1), VII - 5 脱皮(2), VII - 10 死.  
[オオアブラススキ]
21. 若齢幼虫(頭幅 0.846 mm, 推定 2 齡). 1973 - VII -  
1, オオアブラススキ  
VII - 3 脱皮(1), VII - 6 脱皮(2), VII - 14 脱皮(3),  
VII - 24 脱皮準備開始, VII - 26 前蛹化, VIII - 6  
羽化(否). [オオアブラススキ]
22. 若齢幼虫(頭幅 0.830 mm, 推定 2 齡). 1973 - VII -  
1, ススキ  
VII - 2 脱皮(1), VII - 5 脱皮(2), VII - 11 脱皮(3),  
VII - 21 脱皮準備開始, VII - 22 前蛹化, VIII - 2

## 羽化(♂)。[オオアブラススキ]

23. 前蛹。1974-VIII-9, オオアブラススキ

VIII-10 不完全蛹化; 死。

<まとめ>

I. 夏世代(いわゆる第2化成虫となる世代)については、卵(6月上旬)から蛹(8月上旬)までを、ほぼひととおり記録した。しかし越冬世代については越冬前の幼虫(9月上旬~10月上旬)のみにとどまり、越冬中とその後のものは見ていな。文献上でもいまのところ、越冬後の幼虫の記録(高橋, 1958・1972)を見るのみである。

II. 幼虫または蛹を見た植物は、オオアブラススキ、ススキ、カゼクサ、ササクサの4種であった。この中に過去に記録された自然状態での食草が含まれていないことは、白水隆博士が述べたように(白水・原, 1972), 食草の範囲が広いことを示すものであろう。

幼虫と蛹の合計18例の大部分はオオアブラススキ(10例)とススキ(6例)から見いだされた。しかし、成虫がふつうな割りに幼虫を見る機会が少なく、また、オオアブラススキやススキは幼虫の巣を見つけやすい植物なので、これらを飯能での夏~秋の主食草と見るのは尚早であろう。

飼育の際に与えたアキノエ/コログサ、アズマネザサ、ナリヒラタケは野外の食草と共に、いずれもよく摂取された。このうちアズマネザサについては、野外での造巣・摂食を東京都下で確認している(信太, 未発表)。

III. 卵から飼育して羽化したのは夏世代の2例(1, 2)だけであるが、これらは卵期8日、幼虫期38日および45日、蛹期9日で、全幼生期間は1. が55日、2. が62日であった。他の不完全な飼育例では、やはり夏世代で卵期8日、蛹期7~10日であった。

全幼生期間を飼育した前記2個体では、幼虫の齢数は共に6齢であった。しかし、7月上旬採集の1齢幼虫(7)は5齢で蛹化した。また、断定的なものではないが、採集時2齢と推定したものには、5齢蛹化(6, 21, 22...すべて夏世代), 6齢蛹化(8...夏世代) および7齢蛹化(13...越冬世代, 年内羽化)の場合があった。すでに高橋昭氏は8齢の場合を報告している(高橋, 1958)ので、本種の幼虫齢数は同氏が指摘したコキマダラセセリと同様、一定しないものであろう。

年2化の場合、成長の早い夏世代は越冬世代より齢数が少ないようである。しかし、5齢と推定される例が他の齢数の場合より多かった点については、上記の季節的な現象の上に飼育の影響が重なって齢数が減少した疑いを残している。

### ホシチャバネセセリ

#### <記録>

1. 終齢幼虫. 1967-V-21, オオアブラススキ  
V-22 前蛹化, V-24 蛹化, VI-4 羽化(♂).  
[屋外容器, オオアブラススキ]
2. 終齢幼虫. 1967-V-21, オオアブラススキ  
V-25 前蛹化, V-26 蛹化, VI-6 羽化(♂).  
[屋外容器, オオアブラススキ]
3. 終齢幼虫. 1967-V-21, オオアブラススキ  
V-30 前蛹化, V-31 蛹化, VI-15 ヒメバチ羽化  
脱出. [屋外放飼, セイバンモロコシ]
4. 終齢幼虫\*. 1967-V-27, オオアブラススキ  
V-29 前蛹化, V-31 蛹化, VI-11 羽化(♂).  
[屋外放飼, オオアブラススキ]
5. 終齢幼虫\*. 1967-V-27, オオアブラススキ  
V-30 前蛹化, V-31 蛹化, VI-21 ヒメバチ羽化  
脱出 [屋外放飼, オオアブラススキ]
6. 終齢幼虫\*. 1967-V-27, オオアブラススキ  
VI-2 前蛹化, VI-3 蛹化, VI-14 羽化(♀).  
[屋外放飼, オオアブラススキ]
7. 終齢幼虫. 1967-V-27, オオアブラススキ  
V-29 前蛹化, V-30 蛹化, VI-11 羽化(♂).  
[屋外容器, オオアブラススキ]
8. 終齢幼虫. 1967-V-27, オオアブラススキ  
V-30 前蛹化, V-31 蛹化, VI-12 羽化(♂).  
[屋外容器, オオアブラススキ]

9. 終齢幼虫. 1967 - V - 27, オオアブラススキ  
V - 31 前蛹化, VI - 1 蛹化, VI - 13 羽化(♂).  
[屋外容器, オオアブラススキ]
10. 終齢幼虫. 1967 - V - 27, オオアブラススキ  
VI - 1 前蛹化, VI - 2 蛹化, VI - 13 羽化(♂).  
[屋外容器, オオアブラススキ]
11. 終齢幼虫. 1967 - V - 27, オオアブラススキ.  
VI - 4 葉から転落, アリに襲われ死.  
[屋外容器 → 屋外放飼, オオアブラススキ]
12. 中齢幼虫. 1967 - VII - 23, オオアブラススキ  
VII - 25 脱皮(1), VIII - 2 行方不明. [屋外容器 →  
屋外放飼, オオアブラススキ → アブラススキ]
13. 終齢幼虫. 1967 - VIII - 8, オオアブラススキ  
VIII - 10 前蛹化, VIII - 11 蛹化, VIII - 16 死.  
[屋外放飼, オオアブラススキ]
14. 終齢幼虫. 1967 - VIII - 8, オオアブラススキ  
VIII - 10 前蛹化, VIII - 11 蛹化, VIII - 17 蛹消失.  
[屋外放飼, オオアブラススキ]
15. 終齢幼虫. 1967 - VIII - 8, オオアブラススキ  
VIII - 11 行方不明. [屋外放飼, オオアブラススキ]
16. 亜終齢幼虫. 1968 - V - 5, オオアブラススキ  
V - 6 脱皮(1), V - 23 前蛹化, V - 25 蛹化,  
VI - 9 羽化(♀). [屋外容器 → 屋外放飼, オオア  
ブラススキ]
17. 亜終齢幼虫. 1968 - V - 5, オオアブラススキ  
V - 15 脱皮(1), VI - 2 前蛹化, VI - 4 蛹化,  
VI - 16 羽化(♀). [屋内容器 → 屋外放飼, オオア  
ブラススキ]
18. 前蛹. 1968 - VI - 2, オオアブラススキ  
VI - 3 蛹化, VI - 14 羽化(♂). [屋内容器]

14. 前蛹. 1968 - VI - 2, オオアブラススキ  
VI - 3 蛹化, VI - 14 羽化(♂). [屋内容器]
20. 終齢幼虫. 1968 - VI - 2, オオアブラススキ  
VI - 3 造糞摂食, VI - 4 行方不明。[屋外放飼].
21. 1齢幼虫. 1968 - IX - 8, オオアブラススキ  
IX - 11 1眼起, IX - 19 2眼起, IX - 20 飼育不  
手際で圧死。[屋外容器, オオアブラススキ]
22. 終齢幼虫. 1969 - VI - 1, オオアブラススキ  
VI - 11 前蛹化, VI - 13 蛹化, VI - 25 羽化(♀).  
[屋外放飼, オオアブラススキ]

#### <まとめ>

採集例が終齢を主とする越冬後の高齢幼虫に偏り、生活史に関する成績を得ていはない。夏世代については羽化させたもののかなく、わずかに越冬世代の羽化例で蛹期11～12日(12例), 15日(1例), 6月上旬～下旬に羽化という結果を見た。ススキから幼虫が採集され飼育された例が報じられているが、筆者の飼育例ではアブラススキ, セイバンモロコシを与えた終齢幼虫もよく採取した。

#### <付記>

飯能は、かつて旗田昭氏によって本種の2化性が最初に指摘された産地である(旗田, 1954)。成虫の出現状況について同氏は、1953年9月に集上や路上で多數を見たと述べている。しかしその13年後にはじまる筆者の調査行では、成虫の出現期に当たることも何回かあったにもかかわらず、こうした状況には出合わなかった。大抵たま機会がなかったためもあろうが、成虫を見たのはわずかに1966年8月28日の1♂, と1967年9月3日の1♂(株)\*があるだけである。幼虫の発見数も多くなく、1967年5月27日の終齢13(8株<うち記録済3\*>)を最多とし、その2年後の1969年6月1日の終齢1(株)を最後に記録を欠いている。1975, '76の両年は同地に出向いていないのでこの間の消息は明らかでないが、近年極端に減少したことはすちがいなく、衰退の様子を見せないホソバセセリやヒメキマグラセセリと比べて大きな違いを生じた。藤岡知夫氏も「日本産蝶類大図鑑」(1975)の中で、天覧山の本種が最近はすっかり姿を消してしまったと述べている。原因は単純ではないであろうが、その一端は筆者の幼虫採集にあつたかもしれないと思うところである。

## 入間川堤防におけるシルビアシジミ・ ミヤマシジミの探索

原 聖樹

1976年9月2日 15:30～17:30 (<もり)

入間川右岸堤防の初雁橋～雁見橋(川越市)においてシルビアシジミとミヤマシジミの探索を実施した。堤防および河川敷の状態は、ミヤコグサの生育に好適な環境ではなく(それなりに多少植物遷移の進行した段階)、ミヤコグサは見当らない。コマツナギは雁見橋付近に見られたが、食草として量的には少ない感じだった。結局、両種とも未発見であり、また分布している可能性もほとんどないと思われた。

以下、同地における確認種を記録しておく。(○ = 新鮮、  
◎ = 鮮度中間、● = 汚損個体を示す)

(セセリチョウ科) ギンイチモンジセセリ(夏型) 3♀ 5♂ ○・2♂ ◎, 14-  
モンジセセリ 多数♀○, ミヤマチャバネセセリ 1♀ 1♂ ○,  
(アゲハチョウ科) キアゲハ 2exs.,  
(シロチョウ科) キチョウ 1♀ 2♂ ○(夏型)・1♀ ○(秋型), モンキチョウ  
1♀ ○(白色型)・1♂ ○, モンシロチョウ 2♀ ○, スジグロシロチョウ  
1♀ 1♂ ○  
(シジミチョウ科) ベニシジミ 1♀ 2♂ ○・1♂ ○, レリシジミ 2♀ 2♂ ○,  
ヤマトシジミ 1♀ 4♂ ○, ツバメシジミ 多数♀○・少數♀○,  
(クテハチョウ科) キタテハ 1♀ 2♂ ○・2♀ ○(夏型)・3♂ ○(秋型),  
アカタテハ 1♀ ●,  
(ジャノメチョウ科) ヒメウラナミジャノメ 多数♀○・少數♀○, ヒメ  
ジャノメ 多数♀○・少數♀○,

## 埼玉県初記録のハスオビヒゲナガカミキリ

野沢 雅美

埼玉県動物誌仮目録(斎藤良夫, 1975)の鞘翅目リストに記載されていないカミキリムシ科の1種を得たので、ここに報告しておく。

種名 ハスオビヒゲナガカミキリ *Cleptometopus bimaculatus*  
BATES.

場所 越生町黒山

日時 1976年10月2日 (p.m. 3:30) <もり

(埼玉県産蛾類分布資料 46)

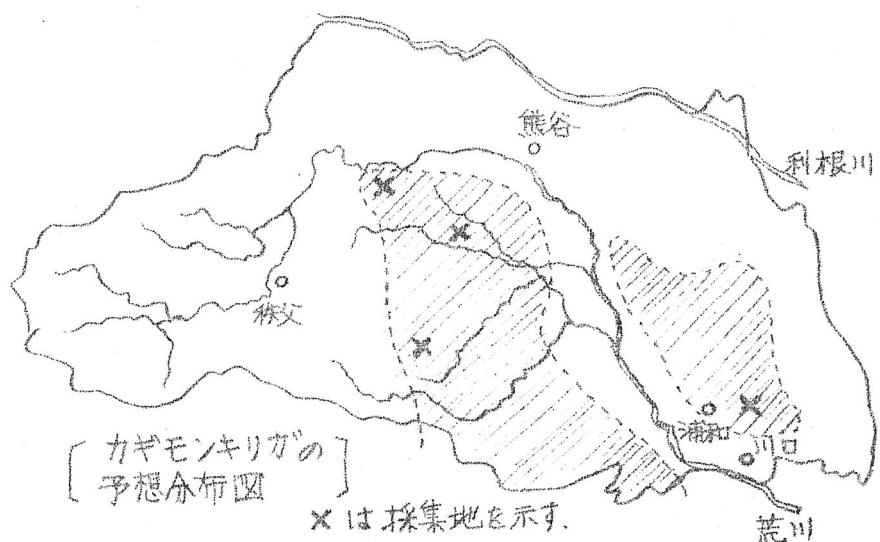
## 埼玉県のカギモンキリガ

並木 彰雄

埼玉県のOrthosia属については、日本で知られている19種全種の分布記録が知られているが、この内ナマリキリガ・イイジマキリガの2種については標本を見ていないため未確認です。

カギモンキリガ(Orthosia nigromaculata HÖNE)については、2個所から採集記録が知られている(未発達記録を含む)が、1975年及び1976年に共に多数の個体を採集し、分布も点から面にわたって見られるようになったので、ここに発表したい。

本種は他のOrthosia属の種とはかなり異なり、関東南部以西に分布が広がっており、本県はその北限にあたると思われる。食草はツルグミと言われているが、県内では確認していない。



これまでの採集記録と、今回新しくわかつた産地は次の通り。

1. 川口市戸塚一本木(標高約10m) 1♂, 31-VIII-1968 岸本和平(採)
2. 飯能市須崎(約500m) 2♂, 3-V-1970 鶴巻照夫(採)
3. 比企郡嵐山町(約100m) 6♂, 11-V-1975 並木彰雄, 大島進一, 篠比地秀夫(採)
4. 犀ヶ浦東狹山村坂本(約250m) 1♂, 13-IV-1976 篠比地秀夫(採)
5. " (同所), 多数♂, 1♀ 並木・大島・篠比地・小林謙太郎・大島一三(採)

6. 東秩父村坂本，多数占，26.IV.1976，並木・大島・小林・大石  
(採)

(註) 採集標本は 1. 2 は筆者，4. は採集者，それ以外は採集に同行した各自が保管している。

以上の4地点で坂本が今所一番北に位置しているが、今後の調査でどこまで北上出来るだろうか、また、荒川本流を越えて鐘撞堂山、陣見山あるいは宝登山などで採集されれば、分布の北限は群馬県にまで広まる可能性がある。また、これらの山地を含め奥武藏山地の西側への分布は、今の私の知る範囲では分布していないであろう。名栗川・高麗川沿いに奥に入れば分布の可能性があるがいずれも山伏峠・正丸峠・刈場坂峠までは達していないだろう。これら山地の他、丘陵地帯からは今後新産地が見つかろう。いずれ条件の良い所はスギ等の権林が多い為、発生している個体数は少ないであろうが、雑木林の多い所が沢場であろう。

成虫に關して知りえた生態的知見(1975~'76年の経験による)

- (1) 成虫は白熱電球や誘蛾灯には見むきもせず、高圧水銀灯に多く集まる。初期の採集で顔振峠で得た個体と、今年坂本でえた1個体だけは例外で、他は全部水銀灯で得た。
- (2) 成虫は比較的活発に飛び、幕や水銀灯の下に止まつても長くそこにとどまることはなく、すぐに飛び立ってしまうので、ネットがないと数多く採集できない。
- (3) 夜半活動型で、午後10時頃から飛来が始まり、午前2時頃まで盛んで、その後日の出までホツツホツツ来るが数も多くなく、又、電柱等に残ることなく飛んで行ってしまい。鳥に食べられ残っている翅は、他の多くの蛾にくらべてきわめて少い。

幼虫の食草ツルグミ(*Elaeagnus glabra* THUNB.)の分布は、関東では神奈川県、東京都、埼玉県、群馬県及び栃木県の南部、千葉県、茨城県と東北の福島県の太平洋地域で知られている。常緑の蔓性低木で低山帯に自生するグミ科植物。

(並木彬雄：川口市 並木元町5~2)

### 浦和のトラフシジミ 健在

松本 和馬

浦和市秋ヶ瀬の荒川堤内でトラフシジミを採集し、まだ健在であることを確認できました。同じ頃に2頭を採集、1頭を目撃した人もあります。(記録) 1976年6月27日、1♀(新鮮な夏型)

## 埼玉県産 半翅類雑記 (I)

県立農業教育センターで得られた半翅類 —— 野沢雅美

1975年5月12日から16日までの5日間、江南村大字御正新田にある県立農業教育センターに滞在し、半翅類の採集をする機会に恵まれたので、その結果を記録しておくことにした。

### 異翅亜目 Heteroptera

(カメムシ科)

1. トゲシラホシカムシ *Eysarcoris parvus* Uhler  
12 - V - 1975 (1 ex.)

(ヘリカメムシ科)

1. ホオズキヘリカメムシ *Acanthocoris sordidus* Thunberg  
14 - V - 1975 (1 ex.)

(オオホシカムシ科)

1. ヒメホシカムシ *Physopelta cincticollis* Stål  
13 - V - 1975 (1 ex.)

(サシガメ科)

1. クロモンサシガメ *Pirates turipes* Walker  
14 - V - 1975 (4 exs.), センター内の落葉樹付近の  
地際に多く見られ、幼虫・成虫とともにこの時期に観察できる。

2. ヤニサシガメ *Uelinus nodipes* Uhler  
13 - V - 1975 アカマツ林の樹幹面で羽化中であった。

3. トビイロサンガメ *Oncoccephalus philippinus* Leth-  
erry 13 - V - 1975 (1 ex.), 幼虫を得たのであるが、  
本属は前腿節の形態によって数種に分け、本県には明らかに3種  
が存在するものと思われる。

(マキバサシガメ科)

1. キバネアシブトサシガメ\* *Prostemma fiborti* Jakov-  
lev 13 - V - 1975 (1 ex.), 筆者の知る限り、本県  
で最初に記録する個体と思う。

(メクラカムシ科)

1. クロマルメクラガメ *Orthoccephalus funestus* Ja-  
kovlev 13 - V - 1975 (2 exs.)

(ナガカムシ科)

1. オオメ(ナガ)カムシ *Piocoris varius* Uhler  
13 - V - 1975 (1 ex.)

2. コバネヒョウタンナガカメムシ *Togo hemipterus* Scott  
12 - V - 1975 (1 ex.)
3. キベリヒョウタンナガカメムシ *Pachybrachius lateralis*  
Scott 12 - V - 1975 (1 ex.)
4. ニッホンコバネナガカメムシ *Dimorphopterus japonicus*  
Hidaka 12 - V - 1975 (2 exs.), 短翅型。

同翅亜目 Homoptera

(セミ科)

1. ハルゼミ *Terpnosia vacua* Oliver  
12 - V - 1975 (1 ex.), センター周囲にはアカマツ林が多く個体数も極めて多い様子であり、県内でも特産すべき産地と思われる。5日間でやっと1個体を得た。  
(クロヒラタヨコバイ科)
1. クロヒラタヨコバイ *Penthimia nilida* Lethierry  
13 - V - 1975 (3 exs.).

(野沢雅美：飯能市東町11～2)

ムカシトンボの採集例

松本 和馬



本県におけるムカシトンボの既知産地としては奥武蔵の伊豆ヶ岳、正丸の大藏平、東吾野駅付近、および秩父の熊倉山麓(鹿の湯)、武甲山麓(橋立川)が挙げられている(長須房次郎, 1973)。

筆者は写真の個体を採集し、埼玉大学附属中学

で、ここに報告し記録しておくことにした。

ムカシトンボ *Epiophlebia superstes* Selys

秩父郡 大滝村 三峰山

4 - V - 1969 (1♂), 筆者採集・埼大附属中 保管

## 行動の記録

### イチモンジセセリ の群移動を見る

松本 和馬

1976年9月11日、朝7時頃、与野市上峰地内の内道というバス停に居たところ、付近のイチモンジセセリがみな同方向(西南向き、秋ヶ瀬橋方面)に飛んでいるのに気付いた。視界に入るのが1~3頭というごく薄い群れであったが、20分間に約100頭くらいか、すべて例外なく同方向に弾丸の如く飛び去って行った。時には近くのサツマイモの葉に休む個体もあるが、数秒後には忙がし気に飛び去ってしまう。また、このような静止した個体の近くを別の個体が通過すると、その後を追う様に飛び立つこともある。

バスを待つ間のこととて、正確な数を記録したりしなかったのが残念だが、初めて見る珍らしい現象に興味をひかれた。また朝7時という時間帯にこのような移動があるというのもめずらしいと思う。  
(松本: 与野市上峰 304)

— × — × — × —

### 訂正のおねがい

(1) 131頁 地名の[北野]は[新津市北野]。

下19行目のママイモは「ママイモ」。

下14行目に次の文を加える、「オオアブラスキ  
裏に前蛹 2exs. V-2'68 [餌能]」。

(2) 123頁 赤生町の蛾は「1974年9月21日採集」。

(3) 140~142頁を「埼玉県産蛾類分布資料 45」とする。

### クロスジフユエダシク の交尾行動

市川 和夫

1975年11月4日に群馬県利根郡の上の原高原を訪れ、午後3時頃に湯の小屋温泉まで約2kmのミズナラ林にさしかかったところ、林内の地上30cm~50cmの高さを約50頭のクロスジフユエダシクの雄がほぼ同じ向きにゆっくり飛んでいるのを発見した。ミズナラ林は約50m四方で東側はカラマツの植林地に続いており、林床には枯葉が厚く積み重なっている。雄はほぼ直線に飛んでいくが、急に下の落葉の所に降り、落葉の上や枯葉の間を歩き回るが、そこには必ず此雄がいて交尾が行われる。落葉の間に居る雌を人がさかすのは難しいが、雄の行動を見ていれば簡単に発見できる。

雌がアロモンを出しているとしても雄が飛びながらそれを知る距離は30cm前後であること、交尾中の個体を約10例見たがすべて地表の枯葉上であり、樹幹や樹枝上で交尾をするものは見出せなかつた。当日は快晴で林内に陽がさしていた。